

4. 活動を通じた地域との連携 ～学生と地域をつなぐ～

ボランティア・NPO活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達へ向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフを中心に提供しています。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

事業名	プチふかくさ100円商店街への協力
日時	2014年5月31日（土）10時00分～14時00分
場所	深草商店街、および深草小学校
実施主体	深草商店街振興組合
参加人数	本学学生39名（うち学生スタッフ30名）
企画メンバー （学生スタッフ）	田中 奏多、田部 翔、藤原 恵太、石野 遼平、白土 奈央、中村 勇介、 小田 美紀、中村 太紀、藤野 優祐、永田 紗瑛

■経緯・目的

近年、深草商店街では特に若年層の来客数が減少しており、活気が失われつつあり、商店街側からは学生ボランティアにぜひかかわってほしいと要請があった。

今回私たちがかかわる意義は2つあり、1つは龍谷大学生への広報を重点的に行うことで、学生に深草商店街の存在を認知してもらうこと。それによって継続的に商店街へ足を向けてもらうきっかけを作ること。2つ目は、11月のふかくさ100円商店街へ向けての予行演習だった。2つ目の目標については、ふかくさ100円商店街の開催が授業実施日（祝日月曜日）に移行してしまったことでセンターとして企画を行うことはできなくなったが、通常のボランティア募集を行った。

■概要

- 輪投げ、塗り絵のブースを出展する。
- 学生スタッフはブース以外のボランティアを担当する。
- 一般学生およびコアメンバーはブースを担当する。
- 空き時間に積極的に商店街を回り、地域の方々とコミュニケーションをとる。
- ロン君を活用することで龍谷大学に親しみを感じてもらう。



■参加者の声・得られた成果など

- 子どもが苦手だけど、今回で好きになった。
- 子どもと触れ合えて楽しかった。
- 地域の人と話げできた。
- 160人前後がブースに来場し、目標人数（150～200）を達成できた。
- 景品を渡す時に引換券を使うという方法がよかった。
- 事故も怪我もなく、無事に終えることができた。
- 行列の乱れを直すのが大変だった。やんちゃな子の対応が大変だった。

■反省点

- 輪投げの投げ位置が曖昧だった。特に幼稚園児がどこから投げているかのルールがなかった。



- 暑かったので、休憩をもっとこまめにとるべきだった。
- ブースにかかりきりで、商店街を見て回れなかった学生がいた。
- 学生スタッフはシフトを作成して動いたほうがよかった。

■学んだこと・今後の課題

今回のふかくさプチ100円商店街は、参加が決定したのが遅かったこともあり、十分に計画を練る時間が取れない中でのスタートとなった。今年度の学生スタッフ全体の目標が「龍大生を巻き込む」というものだったので、それを念頭に置いて、企画内容を推敲し、ブース用品の作成にかかる時間はなるべく抑え、広報に重点を置いて活動することを最初のミーティングで決めた。ブースの内容も綿密な情報共有が必要なものではなく、初めての学生がすぐに理解できる輪投げと塗り絵に決定した。

広報は5/1～5/12までの期間、作成したチラシを昼休みに学生スタッフで配布した。また、その期間に立て看板も作成し、掲示した。教員に掛け合って、授業前の時間にチラシを配布をさせていただくといったことも行った。その甲斐あって9名の龍大生からの応募があり、全員にセンターに来てもらい、顔合わせと事前説明をすることができた。

当日は、予想以上の盛況で、1時間を残してあらかじめ用意した分の景品が切れてしまうほどだった。

参加者の子どもたちばかりではなく、ブースを運営している龍大生や、ほかのさまざまな役割を担っていた学生スタッフ、全員が楽しそうにしていたのが印象的だった。

- 企画代表者として、大きな反省点は3つある。
1. ミーティングの開催日時を固定しなかったこと。忙しい時期だったので、そのつど開催可能な曜日を聞いていたら、次回ミーティングまで1週間空いてしまうことが何度かあった。基本は週に1回、曜日も固定したほうが良いと思う。



2. コアメンバー内部での役割分担をしっかりとしなかったこと。計画を練る途中で広報担当とブース担当にコアメンバーを振り分けたが、その2つにうまく指示を振り分けて出すことができなかったため、結局は全員が同じことをやる効率の悪い方法になってしまった。次回からは計画の概要が決まった時点で担当を分け、企画者が毎回のミーティングでできちりと役割を割り振るようにしたい。
3. 商店街側との連携がうまく取れていなかったこと。情報の共有は会ったときだけでなく、常にLineやメールで行っておくべきだった。

様々な反省点や今後の課題は見つかったが、全体としてこの企画は成功であったと考えている。単にこのイベントを盛り上げるだけでなく、多くの商店街の方々とのかかわりを通して、私たち自身もより深草商店街を理解し、親しみを持つことができたからだ。龍大生9名にも、ただ単に楽しんでもらうだけでなく、商店街を認知してもらい、足を向けてもらうきっかけになったと思う。11月の「ふかくさ100円商店街」はセンター事業としてかかわることはできないが、ボランティアを紹介することは可能なので今後も、継続的に関わっていきたいと思う。

〈報告者：田中 奏多〉

事業名	こどもサマーフェスティバル2014 竹と水の共演
日時	2014年8月21日(木) 13時30分～16時30分
場所	京都市深草児童館
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター(深草)
参加人数	本学学生計22名(うち学生スタッフ13名)
企画メンバー (学生スタッフ)	小松 茂樹、梅川 翔太、小山 由貴、中村 勇介、津田 莉沙、新川 貴大

■経緯・目的

以前から定期的に深草児童館でボランティア活動を行ってきました。そういった関係もあり、昨年度は防災劇をさせて頂きました。これがたいへん好評でしたので、子ども達のために夏休みのイベントを企画してほしいという依頼がありました。

そこで、以下のようなことを目的として、この依頼を受けることにしました。

- ①子ども達に夏休みの思い出を作ってもらおう。
- ②長期休暇を利用して、今までにボランティアをしたことのない龍大生にも参加する機会を作る。
- ③子ども達が地元の竹に親しむ機会を作る。龍大生に児童館を知ってもらう。

■概要

- 11:30 センター集合
アイスブレイク
当日の動き、準備物の確認
- 12:30 深草児童館到着 準備開始
- 13:30 開会式
- 13:45 ゲーム開始(竹水鉄砲ブース予選開始)
竹ボウリング、シャボン玉、休憩・説明、ブース同時進行
- 14:30 4ブース終了(竹水鉄砲ブース予選終了)
- 14:45 竹水鉄砲 決勝
- 14:55 竹水鉄砲 学生と対決
- 15:10 みんなでスイカを食べる
- 15:30 閉会式
- 16:00 ふりかえり
- 16:30 活動終了

■参加者の声・得られた成果など

児童館職員の内田氏「子ども達は、数日前からとても楽しみにしていて、心待ちにしていま

した。当日は、学生のおかげで子ども達みんなが大盛り上がりでとても良い一日になりました。」

学生Aさん「準備段階から関わることができて、本番も成功したのでとても嬉しかった。」

学生Bさん「レベルの高い計画だったので、上手くいくか心配であったが、成功して本当に良かった。」

学生Cさん「子ども達と共に盛り上げられたし、とても楽しめた。またこのようなボランティアに参加してみたい。」

準備段階から地元の自然に触れ合えた。当日の動きの確認のために事前に学生にも集まってもらった。当日も目的を把握しながら活動することができた。深草児童館を知ってもらうこともできた。



■反省点

- 広報期間に活動できず、他の学生スタッフへの呼びかけも上手くできていなかった。そのため、学生がなかなか集まらず、広報期間が延びてしまった。
- ミーティングでほとんど進まない時期があった。考える優先順位が中途半端だった。
- 予定終了時間を大幅に遅らせてしまい、ふりかえりまで参加できない学生がいた。

■学んだこと・今後の課題

- 興味のある学生には直接連絡先を聞くなど、

広報をもっと積極的にしていきたい。

- ・ミーティングでの時間の使い方を考え、時間を効率良く使う。意見を出す場とする。決まっていなくても多くても、そのときにできることから考えていく。
- ・コアメンバーだけの力では成り立たないので、積極的に他の学生スタッフの協力を促していく。
- ・リハーサルを行ったことでイメージが湧き、修正点なども見つかったので、実施することは必要であると考えます。



〈報告者：梅川 翔太〉

事業名	深草ふれあいプラザへの出展
日時	2014年10月19日（日）9時00分～16時00分
場所	藤森神社
実施主体	深草ふれあい事業実行委員会
参加人数	本学学生41名（うち学生スタッフ21名）
企画メンバー （学生スタッフ）	山本 富美子、田部 翔、藤原 恵太、山本 翔、今井 夏帆、木谷 翔太、 藤野 優祐、永翁 ふみな、橋本 望海、三戸部 香帆、大矢 誠志、 馬庭 颯斗、春名 亮佑、上野 翼、百済 圭吾

■経緯・目的

深草ふれあいプラザとは、幅広い世代の住民相互の交流と深草地域の魅力を再発見することを目的として、多くの地域の皆さんの協力のもと開催されている祭りである。私たちは日頃、地域と学生との関わりが薄いことを問題と想っていた。学生と地域をつなげ地域を活性化するために、地域の方が集まる祭りに参加し、以下のことを目的として企画を実施した。

①地域とセンター

私たちと地域が関わることによって、地域の方にセンターのことを知ってもらい、私たちも地域の団体を知る。

②地域と龍大生

当日のボランティアでは、地域の団体が運営する模擬店等を手伝うということを通して、地域の方とふれあう機会を作る。

③センターと龍大生

- ・地域と龍大生をつなげる架け橋になることができる。
- ・この企画に深く関わってもらうために、企画段階から一般学生に参加してもらい、ボランティアに参加することの楽しさを知

てもらおう。

- ・学生スタッフのみで考える企画とは一味違った企画を作る。

■概要

- ・ゆるキャラ7体と15分間のステージを作る。一般学生に企画段階から関わってもらおう。
- ・ボランティアは模擬店の販売補助を行った。空き時間は会場内を自由に回ってもらい、地域の方と関わってもらった。
- ・センターの紹介ブースを設置した。

■参加者の声・得られた成果など

（一般学生）

- ・地域の方と話すことができ、地域の方と触れ合え、とても満足だった。
- ・深草地域でこんなに盛り上がっているお祭りがあることを知ることができて良かった。
- ・ボランティア＝人助けというイメージがあったが、ステージを作り上げていくことによりボランティアに対するイメージが変わった。

（学生スタッフ）

- ・一般学生と企画から作り上げることで新鮮さ

や面白みがあり、新しい関わり方ができた。また、学生スタッフにとってもよい刺激になった。

- 深草支所の方から、「ゆるキャラのステージも子どもたちに楽しんでもらえ大変好評でした。」と言っただき、やりがいと達成感があった。
- はじめてボランティアに参加する学生にとって参加しやすいボランティアだった。どの模擬店の補助に入るかを事前に決めていたことにより、何をしたらよいか分かりやすく、団体の方とも関わりやすくなった。
- 参加した学生へのアンケートや振り返り会を実施したことにより、今後のボランティアの広報もでき新しいつながりができた。さっそく11月のボランティアへの申込みがあっよかった。

■反省点

- 学生スタッフのミーティングへの参加率が悪く、効率よく決めていくことができなかった。
- 企画メンバー全員に仕事を分担することができず、一人当たりの負担が大きくなる、またはなかなか仕事がない面があった。
- 各模擬店の仕事が事前に理解できておらず忙しさに差があったが、途中で調整ができなかった。
- 学生スタッフだけでかたまることもあり、一般学生への配慮が足りない部分があった。

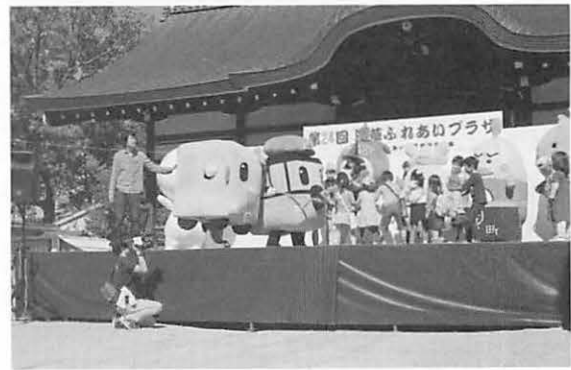
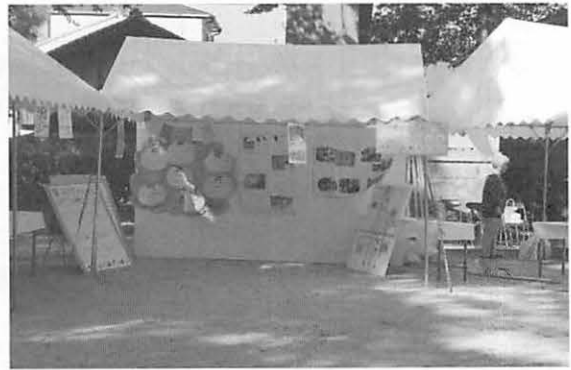
■学んだこと・今後の課題

- ミーティングでは毎回何を決めるのかをはっきりさせ、効率よくミーティングを進めていく。
- 情報共有をしっかりと行い、仕事を分担できるようにし、企画メンバー全員でつくりあげる形にする。
- 参加した学生に積極的な声かけをすることで、次のボランティアやセンターとのかかわりにつなげられることがわかった。

(プチ深草100円商店街やサマーフェスティバルなどへ参加した学生が数名あった)

- 留学生の満足度が大変高かった。今後のボランティア募集の際に、留学生へのアプローチも加えれば、国際色豊かな活動になる可能性がある。
- 初めて参加した学生のボランティアに対するイメージを変えることができた。今後も、ボランティアは難しくないということを広報し、ボランティアへの参加を促すコーディネートを行いたい。

〈報告者：小山 由貴〉



事業名	丸屋町商店街のまちづくり活動へのボランティア協力（ナカマチ夜市 in 丸屋町）
日時	交流会：2014年7月23日（水）17時10分～19時10分 夜市当日：2014年7月26日（土）15時00分～21時30分
場所	大津市丸屋町商店街
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	29名（うち学生スタッフ11名）
企画メンバー （学生スタッフ）	藤村 由香、仲田 匡志、中村 健人、山内 康平、西川 浩由、中川 真実、 中村 香菜、佐久間 涼、福納 知香、三輪 可那子、矢橋 耕助

■経緯・目的

大津市の丸屋町商店街で毎年行われているナカマチ夜市という縁日がある。センター(瀬田)では丸屋町商店街振興組合からの依頼を受け、この商店街へボランティア協力という形で瀬田キャンパスの所在地である大津市のまちづくりに協力している。また、夜市の他にも宵宮や大津100円商店街に関わり、年間を通じて丸屋町商店街での取り組みを行っている。

今回この夜市では、龍谷大学の学生にボランティアの楽しみを知ってもらい、地域との関係を深め、大津のまちに関心を持ってもらうことを目的に活動を行った。

■概要

●交流会

参加学生同士で事前に顔合わせし、当日のボランティア参加への不安を軽減し、活動を円滑に行えるようにした。

①アイスブレイク

②説明会

③出店担当希望調査

④商店街の雰囲気を知ってもらうためのムービーの視聴と説明

●夜市

①アイスブレイク

②まち歩き

③出店準備

④活動内容

- ・学生が企画した出店の運営（たまごせんべい [たません]、さかなつりゲーム）
- ・学生企画：商店街の魅力に気づいてもらうことをテーマにした「ありのままの丸屋町へ～レッツ スタンプラリー～」の実施
- ・商店街の出店の運営補助（かき氷、プラ板、輪投げ、サイコロゲーム、フランクフルト、ぶよぶよすくい）

⑤振り返り（アンケート記入、参加学生の感想共有、大津100円商店街・大津祭宵宮の広報）



■参加者の声・得られた成果など

◎参加者へのアンケート結果

〈夜市参加前のボランティアのイメージ〉

- ・誰かのために、何か役立つことをする
- ・大変、難しい、堅苦しい
- ・やりがいがある、楽しい
- ・勇気がいる
- ・地域貢献

〈夜市終了後のボランティアのイメージ〉

- ・つながりの大切さを実感した
- ・色々な人とふれあえる
- ・対応力、コミュニケーション能力が必要
- ・自分自身の成長にもつながる

→参加前と参加後では「ボランティアは大変なものではなく楽しいこともある」というイメージの変化が見られた。中でも、「ボランティアは色々な人と交流できる場、そしてつながりの大切さを実感した」というイメージの変化を持った人が多かった。

〈夜市に参加して何を学んだか、また、今後、地域活性化のためにどのような取り組みをしていきたいか?〉

- ・自分が積極的に地域に出向いていくことが大

切だと思った。

- 地域の人と交流することの楽しさを学んだ。
 - 来年も夜市ボランティアに参加したい。
 - 祭によって地域の人とのつながりが深まること、そしてそれが地域活性化につながるということがわかった
 - 何事も積極的に、自発的に行動しなければならないと思った。
 - 地域のことを知って、その場限りで終わらない継続的な取り組みをしたい。
- 夜市の活動を通じて、地域の人とつながることによって地域活性につながる一歩になること、また継続的に取り組むことの大切さを知ってもらえた。

■学んだこと

- 地域の方と学生が共に商店街を盛り上げることができた。今回の反省点や良かった点を次回の宵宮や大津100円商店街の企画につなげていきたい。
- 龍大生にボランティアの楽しさを知ってもらえた。夜市のようなイベント系のボランティアを増やしてほしいという声が多かった。今回は募集人員が定員に達しなかったため、今後の広報活動について夜市・宵宮の同時募集について、また広報の方法について再検討したい。
- また、ボランティアの広報を増やしてほしいなど、現在の広報では不十分なことがわかったので、今後改善していきたいと思う。

- 事前に交流会をしたことで参加学生同士が知り合え、また企画コアメンバーも参加学生の顔と名前を覚えることができ、当日の活動がスムーズに行えた。
- 班に分かれていたため、企画コアメンバー間の情報共有不足が目立ったため、大切なことはミーティングで共有するようにしたい。
- ブース運営に関しての改善点（人数配分、事前説明の不足、引継ぎなど）があった。また、これまで後片付けは、学生スタッフと企画メンバーのみで行っていたのだが、「準備から片付けまでがボランティアである」というご指摘を商店街の方から受けたので、今後の大津100円商店街・宵宮での後片付けについては、ボランティア学生にも参加してもらおうことにした。振り返りの時間に関しては、どのような形で行うべきか今後検討していこうと思う。

〈報告者：西川 浩由・中川 真実〉



事業名	丸屋町商店街のまちづくり活動へのボランティア協力（大津祭宵宮 in 丸屋町）
日時	交流会：2014年9月30日（火）17時00分～19時00分 宵宮当日：2014年10月11日（土）12時00分～22時00分
場所	大津市丸屋町商店街及び天孫神社
実施主体	ボランティア・NPOセンター（瀬田）
参加人数	26名（うち学生スタッフ10名）
企画メンバー（学生スタッフ）	藤村 由香、仲田 匡志、中村 健人、山内 康平、中川 真実、中村 香菜、佐久間 涼、福納 知香、三輪 可那子、矢橋 耕助

■趣旨・目的

大津市の丸屋町商店街と共に、活気のある商店街を中心としたまちづくりを目指し、客離れが進み活気が失われつつあるという課題にアプ

ローチするため、大津祭宵宮に参画し、地域を盛り上げる。

来場者に対しては、大津祭宵宮を通して丸屋町商店街の魅力に気づいてもらうことで、また商

店街に来てもらうきっかけをつくる。

参加学生に対しては、大津祭宵宮を通して伝統的な祭や丸屋町商店街の魅力を知ってもらおう。また、ボランティアの楽しさ・継続の大切さに気付くきっかけをつくる。

センターでは、夜市・宵宮・100円商店街と年間を通して丸屋町に関わっている。

■概要

●交流会

今夏の夜市企画で好評だったため、宵宮でも交流会を行った。事前に参加学生同士が顔を合わせるにより当日への不安を軽減し、活動を円滑に進めることを目的に実施した。

①アイスブレイク

②プレゼンテーション

丸屋町商店街についての説明や商店街についてのクイズを行った

③出店担当希望調査とアンケート

④紹介ムービー

商店街の雰囲気を知ってもらうためのムービーの視聴と説明

●宵宮

①宵宮曳き

西王母山の宵宮曳きに参加した

②アイスブレイク

③まち歩き

参加学生に大津祭や丸屋町商店街の魅力を伝えるために商店街と大津祭曳山展示館の案内を行った

④曳山等の説明

桃山保存会の方に西王母山に乗せて頂いたり、蔵の中などの説明をして頂いたりした

⑤出店準備

⑥宵宮イベント

- ・クイズラリーの運営補助（丸屋町商店街及び天孫神社）



●商店街出店の運営補助

フランクフルト、光るおもちゃ、綿菓子、ぷよぷよすくい

⑦振り返り

アンケート記入、参加学生同士の意見共有

■参加者の声・アンケート結果

〈交流会の感想〉

- ・少し面倒だと思ったが、参加してみると有意義なものだった。
- ・当日一緒にボランティア参加する予定の学生と交流会で友好が築けていたので、本番の時に緊張せずに楽しめた。

→アンケートの結果から、事前に交流会をすることは参加者にとって安心につながるのでもっと実施する方向で考えたい。

〈宵宮に参加してみて感じたこと〉

- ・伝統を受け継ぐことの大変さ、そのために地域の方々が一つになって成し遂げようとする気持ちの大きさに驚いた。
 - ・地域の中に入って活動することにやりがいを感じた。
 - ・地域の方と関わることで、今度は客としても商店街に来たいと思った。
- 参加者に伝統的な祭や商店街の魅力に気づいてもらうことができた。

■学んだこと・今後の課題

- ・宵宮に企画メンバーとして参加したことで、丸屋町商店街の魅力や祭文化の継承の大切さを身にしみて感じる事ができた。特に、初めて宵宮曳きに参加することにより、活動のモチベーション向上にもつながった。そして、それを参加学生に対しても伝えることができた。また、宵宮の来場者には、祭で賑わう商店街の雰囲気を感じてもらえた。これをきっかけに商店街に来てもらえることを期待したい。
- ・昨年までは片付けは企画メンバーで行っていた。しかし、商店街の役員の方より助言をいただき、ボランティア活動において片付けまでが活動の一環であると改めて気づいたため、今回は参加学生も一緒に片付けを行った。全員で片付けを行うことにより時間を短縮することもできたので、今後も全員で片付けをしていこうと思う。

・丸屋町商店街の企画にはリピーターの参加学生が多く見られる。継続することで、他のボランティア参加者や以前お世話になった商店街の方とのつながりが生まれ、ボランティアの継続の大切さに気づいてもらっている。初

めの学生もリピーターの学生にも楽しく、たくさんの体験ができるボランティア企画を今後もつくっていききたい。

（報告者：佐久間 涼・中村 香菜・福納 知香）

事業名	丸屋町商店街のまちづくり活動へのボランティア協力 (第10回大津100円商店街 in 丸屋町)
日時	2014年9月6日(土)
場所	大津市丸屋町商店街
実施主体	ボランティア・NPO活動センター(瀬田)
参加人数	14名(うち学生スタッフ8名)
企画メンバー (学生スタッフ)	中川 真実、藤村 由香、仲田 匡志、中村 健人、山内 康平、中村 香菜、 佐久間 涼、福納 知香、三輪 可那子、矢橋 耕助

■趣旨・目的

客離れが進み、活気が失われつつあるという現状にアプローチするため、2つの企画を実施することによって、私たちと同じ世代の学生や子ども、お年寄りや普段商店街に来ない地域の方に、丸屋町商店街の魅力に気づいてもらえるよう、そのきっかけづくりをする。また大津100円商店街には毎回多くの来街者があるが、丸屋町商店街を通過するだけの人も多いため、まず足を止めてもらい、交流をして楽しい時間を過ごしてもらうことで、地域の魅力に気づいてもらう。

これまで丸屋町商店街のまちづくり活動として夜市、大津祭宵宮、大津100円商店街に参画させて頂いていたが、大津100円商店街では龍大生へのボランティア募集を行っていなかった。しかし、学生に商店街や大津の街の魅力に気づいて欲しい、関心をさらに持ってほしいという思いから、今回ボランティア募集するに至った。

■概要

1. スタンプラリー

今回は、ボランティア学生に実際にスタンプラリーへ行ってもらおうフィールドワークと、スタンプラリー運営の手伝いを行った。午後からのスタンプラリー運営の手伝いをさせていただくにあたり、午前中に実際に自分たちが体験をすることで、参加して下さった方々と共感し

合い、そこから商店街での発見や魅力についてコミュニケーションをとることができると考えた。

2. 休憩所

①休憩コーナー

来街者に足を止めてもらい、丸屋町商店街の雰囲気や店主の人柄などの魅力に気づいて頂くこと、学生と地域の方々との交流を深めることをねらいとして、休憩所の運営を行った。

当日は、多くの方々に立ち寄っていただき、お茶出しをしながらコミュニケーションを取ることができた。

②商店街アピールコーナー

店主がどのような思いで店を営んでいるのか、なぜ夜市や100円商店街などのイベントを企画実施しているのかを来街者に知ってもらい、商店街に愛着を持ってもらうことで商店街の利用増加につなげるため、写真パネル等を展示した。

③遊びコーナー

商店街を訪れた子どもたちに、地域の中での交流を深め、丸屋町商店街での思い出を作ってもらおうことをねらいとして、今夏の夜市で好評だった魚釣りあそびを行った。

幅広い年齢層の子どもが来てくれ、また、ランキング表を作成したことで、盛り上げることができた。

■参加者の声・得られた成果など

◎参加者へのアンケート結果

〈当日の活動の感想〉

- 地元の子どもたちや、商店街の方と交流を持つことができた。
- 多くの方と関わることが良い経験となった。
- 活気があり、すごく盛り上がっていた。
- 普段歩くことがない大津の商店街でのイベントに参加できて良かった。

〈スタンプラリー〉

- 地域を知ることができた。
- 大津の隠れた魅力を見つけることができた。
- 実際に街を見ることができて良かった。
- “抽選会に来た方たちが、あの道を歩いてきたのだな”とわかって、「本当にお疲れ様でした。」と思えた。

→多くの方と交流ができたという感想が多かった。また、スタンプラリーを実際に行ったことについては、参加学生全員から「良かった」という声をいただいた。

→実際にスタンプラリーへ行ってもらったことで、ボランティア学生に大津の街の魅力に気づいてもらうことができた。また、スタンプラリー抽選所での参加者とのコミュニケーション時に、感想などを共有することで、体験を活かすことができた。

■学んだこと・今後の課題

- 今回、龍大生のボランティアを6名募集したが、スタンプラリーを行う上での企画メンバーと学生ボランティアの割合、そしてボラ



ンティア全体の作業量を踏まえると、6名で適当であった。今後については、企画の内容によって適切な人数を募集していきたい。

- 休憩コーナーにて、時間帯によっては備品の数やシフトの人数に不足が見られた。シフトにおいて、今後は企画メンバーのシフトにフリー枠を設け、その場ですぐに人数の調節ができるようにする。また、商店街アピールコーナーの展示位置が休憩所と離れていたために、展示内容について来街者と話す機会をあまり持てず、商店街のアピールにつなげることができていなかった。このことを踏まえ、展示を行う位置については、できるだけ休憩所の近くに設置するなど、考慮しなければならない。
- 商店街の方々や、来街者の方々との交流をその場で終わらせてしまうのではなく、そこで得た情報を今後の活動で活かしていけるよう、その方法を企画メンバーで考えていきたい。

〈報告者：三輪 可那子〉

事業名	丸屋町商店街のまちづくり活動へのボランティア協力 (第11回大津100円商店街 in 丸屋町)
日時	2015年3月7日(土)
場所	大津市丸屋町商店街
実施主体	ボランティア・NPO活動センター(瀬田)
参加人数	16名(うち学生スタッフ8名)
企画メンバー (学生スタッフ)	三輪 可那子、藤村 由香、仲田 匡志、中村 健人、山内 康平、中川 真実、中村 香菜、佐久間 涼、福納 知香、矢橋 耕助

■趣旨・目的

客離れが進み、活気が失われつつあるという丸屋町商店街の課題にアプローチするため、2つの企画（スタンプラリー抽選所、休憩所の運営）を実行することによって、私たちと同世代の学生や子ども、お年寄りや普段商店街に来ない地域の方に、丸屋町商店街の魅力に気づいてもらえるよう、そのきっかけづくりをする。また、大津100円商店街には毎回多くの来街者があるが、丸屋町商店街を通過するだけの人も多いので、まず足を止めてもらい、交流をして楽しい時間を過ごしてもらうことで、地域の方々に商店街の魅力に気づいてもらう。

ボランティア募集を行うことで、学生に大津の街や商店街の魅力に気づいてもらうとともに、ボランティア活動のやりがいや楽しさを知ってもらう。

■概要

1. スタンプラリー

今回も前回の9月同様、午前はボランティア学生に実際にスタンプラリーを体験してもらうフィールドワークを行い、午後からは大津100円商店街で実施されているスタンプラリーの運営をお手伝いした。フィールドワークに関しては、スタンプラリー運営所の手伝いをさせていただくにあたり、実際に自分たちが体験をすることで、参加してくださった方々と共感し合い、そこから大津の発見や魅力についてコミュニケーションをとってもらうことができると考え実施した。

2. 休憩所

①休憩コーナー

来街者に足を止めてもらい、丸屋町商店街の雰囲気や商店主の人柄などの魅力に気づいて頂くこと、学生が地域の方々の交流を深めることをねらいとして、休憩所の運営を行った。座れる場所を設け、お茶を出しながら、通りがかりの方や地域の方と多く話した。

②商店街アピールコーナー

来街者に商店街の魅力を知ってもらい、商店街を継続的に利用してもらうために作成した手作りの丸屋町100円商店街マップと、商店街の昔の写真パネルの展示を行った。

③遊びコーナー

商店街を訪れた子どもたちに、地域の中での

交流を深め、丸屋町商店街での思い出を作ってもらうために、遊びブースを運営した。今回は、びゅんびゅんゴマ作りと、大津ひやくえもんくん・ボラボ特大福笑いをを行った。

■参加者の声・得られた成果など

◎参加者へのアンケート結果

〈当日の感想〉

- いろいろな人たちと触れ合えたことが、すごく楽しかった。
- 初対面の人と話すのが苦手なので不安だったが、大津のことをもっと知りたいと思えた。
- 子どもたちと触れ合えたり、笑顔がたくさん見られたりして良かった。
- 地域の人たちと関わることはとても良いことだと思った。
- 地域の人やボランティア参加者と交流の輪を広げることができるので、これからもボランティアに参加したい。

〈商店街の良さを発見することができたか〉

はいが8名、いいえが0名

理由

- 皆さんが楽しそうに商売していたり、買い物をする姿を見て、商店街がとても素敵なものだと知れた。
- 昔ながらのお店の雰囲気が良かった。
- 皆さんの笑顔が溢れていた。
- いろんな年齢層の人と関われる。

■学んだこと・今後の課題

- 遊びブースで大津ひやくえもんの福笑い、展示ブースにて丸屋町手作りマップや昔の写真パネルの展示を行ったことで、来街者に対して商店街の魅力を感じてもらいきっかけをつくることができた。また、休憩所で来街者と交流することにより、共に楽しい時間を過ごすことができたが、商店街の魅力が来街者に伝わっているかは明確ではない。逆に来街者から商店街に対する地域の方の思いを伺い、企画メンバー自身の新たな発見もあった。
- フィールドワークを少人数で行ったことで、学生スタッフとボランティア学生との間で交流を深めることができた。また、実際に商店街を歩いて見て回ったり、商店街の方と話したりしてもらったことで、商店街の雰囲気や大津の魅力をボランティア学生に伝えること

ができた。

- 今回初めてボランティア学生も企画メンバーと一緒に休憩所の運営を担当したが、学生スタッフがボランティア学生と来街者との間をつなげる役割をするべきであった。
- 途中から雨が降り始めたため、ブース全体の場所移動をしたが、展示ブースの移動が遅れ、休憩所から離れた位置に設置したままとなってしまった。移動を迅速に行い、有効に活用するべきであった。
- びゅんびゅんゴマを休憩所で行ったことで、子どもたちがゴマを制作している間に親と多く話すことができ、また、休憩所内で子ども同士が交流している姿も見られ、遊びコーナー運営の目的を達成することができた。
- 今後は、今一度、本企画の活動の趣旨・目的

について考え直すとともに、商店街の方々とコミュニケーションを図り、私たちに何が求められているのか考えながら、活動を進めていきたい。

〈報告者：三輪 可那子〉



事業名	大津祭へのボランティア協力
日時	2014年6月30日（月）、7月1日（火）12時35分～13時35分 「Let's ボランティア」にて学内広報 9月8日（月）14時00分～15時30分 交流会 10月5日（日）10時00分～16時00分 山建て見学 10月11日（土）16時00分～21時30分 宵宮 10月12日（日）8時00分～18時00分 本祭
場所	大津市中心市街地、瀬田キャンパス野外ステージ前（6月30日、7月1日）、 学生交流会館カンファレンスルーム（9月8日）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
延べ参加人数	本学学生112名（うち学生スタッフ64名）
企画メンバー （学生スタッフ）	木村 直人、林 知輝、中山 陽貴、畑中 健吾、山崎 あかり、松尾 拓真、 清水 謙汰、首藤 諭志、田村 奈生、川村 愛香

■経緯・目的

滋賀県大津市中心街を中心とした伝統行事「大津祭」をより多くの学生に知ってもらい、参加してもらうことによって、大津の伝統・文化・現状、またボランティアの良さを伝えていくことを今年度の目的とした。

■概要

① Let's ボランティア（ボランティア広報）

大津祭曳山連盟の方々をお招きし、大津祭の写真展示、お囃子の実演を瀬田キャンパスの野外ステージ前で行った。学生スタッフは、大津

祭のチラシを配布した。

②交流会

大津祭ボランティアに参加する学生の交流を図るために行い、アイスブレイク、クイズ、大津祭の簡単な説明を行った。

③山建て見学

曳山連盟の方々に大津祭りの歴史を伺った。雨天のため曳き初め体験はできず、見学のみになった。

④宵宮（スタンプラリーテーリング）

スタンプ押し、チラシ配布

⑤本祭（曳山綱引きボランティア）

狹師町の「神宮皇后山」の綱引き

⑥本祭（警備ボランティア）

曳山巡行時の観光客の警備、先導

⑦本祭（有料観覧席ボランティア）

観客の誘導、受付

⑧本祭（昼食会場）

昼食会場の準備、片付け

当日、ボランティア活動後に参加者全員でふりかえり、感想を共有した。

[参加者集計]

概要番号	参加人数 ※（ ）は学生スタッフ
①	15名（15）
②	22名（8）
③	21名（9）
④	10名（10）
⑤	10名（2）
⑥	18名（6）
⑦	11名（9）
⑧	5名（5）

■参加者の声

- ・お祭りの雰囲気近くで味わうことができ、観客としてではなくボランティアとして盛り上げることができた。
- ・地域の人とたくさんお話ができた。祭りのことや色々なお話を聞くことができたのが楽しかった。
- ・みんなで協力して大きな曳山を曳いたことにより、一体感を感じる事ができた。

■学んだこと・今後の課題

多くの学生に大津祭に参加してもらうことで、大津の伝統・文化・現状を伝えられました。また、ボランティア後に行ったふりかえりやア



ンケートから、ボランティア活動の良さを多くの人が感じていることがわかり、この企画の目的は達成されたと思う。

今年は、台風の影響が心配された。そのため、ボランティア参加者の電話名簿を作り、企画メンバー一人一人に連絡担当を割り振り、中止時の連絡体制を整えた。また、このお祭り全般をサポートしている大津祭曳山連盟が実施する準備会議が何度かあり参加した。お祭りの準備状況がわかり、連盟担当者との顔合わせにもなり、よい機会となった。

今後の課題としては、事前交流会の準備不足や、連絡手段の改善が挙げられる。事前に参加学生への連絡がとれているのかが把握できておらず、参加者の方々に迷惑をかけてしまった。こういったことを改善するために、交流会をより計画的に準備し、企画メンバー内での共有をしっかりと、連絡では、メールや電話だけでなく、LINEなど新しい方法も取り入れていこうと話合った。

この企画では、大津祭の準備、警備、運営に実際に係わることにより、伝統を継承していくことの難しさ、大切さを学んだ。曳山連盟の方々はボランティア募集の段階から私たち学生スタッフに協力して下さり、事前見学会では大津祭りの歴史、意義を熱心に伝えて下さった。祭が終わっての連盟主催の打ち上げにも参加させていただき、私たち学生の協力を本当に喜び何度もうれしくなりました。その背景には、これからの世代である私たちに大津祭の伝統を引き継いでほしいという強い思いがあると思う。こういった思いを汲み取り、来年度以降もこの企画を続けていかななくてはならないと思った。

〈報告者：松尾 拓真〉



事業名	育ガク★プロジェクト ～育児に協力的な学生が社会を変える～
実施日 受入団体 場所	Step1.「考えてみよう」 講師を招いての学習会・ワークショップ 2014年9月1日（月）13時00分～16時00分 学生交流会館 カンファレンスルーム Step2.「体験して感じよう」 龍大生を対象としたボランティア活動 ①9月2日（火）10時00分～11時30分 ふれあい子育て広場 瀬田東支所 ②9月2日（火）10時00分～11時30分 きらきら広場 アルプラザ4F ③9月3日（水）10時30分～12時00分 ほっこり広場 フォレオ大津一里山 ④9月3日（水）10時00分～11時45分 きらきら広場 アルプラザ4F ⑤9月4日（木）10時00分～12時00分 きらきら広場 アルプラザ4F
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	Step1.「考えてみよう」 20名（うち、企画メンバー6名） Step2.「体験して感じよう」 ①7名（うち、企画メンバー1名） ②4名（うち、企画メンバー1名） ③3名（うち、企画メンバー1名） ④3名（うち、企画メンバー1名） ⑤4名（うち、企画メンバー1名）
企画メンバー （学生スタッフ）	佐々木 奈央、馬場 眞貴子、藤村 由香、近藤 晨吾、北岡 なつみ、 春本 真也、林 知輝、余根田 敦

■経緯・目的

近年、核家族化した子育ての増加や、孤立した子育てなどの問題が現状として存在する中で、大学生が地域の一員として子育てに協力することが必要です。大学生に、現状の問題を深く考えるきっかけと、実際に地域での子育てを体験してもらう機会を作りたいと考えました。また、育児は次に親になる世代である大学生に大きく関わることですが、現状の問題をあまり意識している学生は多くはありません。実際に育児経験者の話を聞き体験することで、育児を少しでも身近なものに感じてほしい、また地域での子育てについて知ってほしいと考え、この企画に取り組みました。

■概要

Step1.「考えてみよう」

育児経験者3名を講師として招いて、3つのグループに分かれてお話をさせていただきました。お話を聞いた後に、各グループで感想を共有し、「学生ができることってなんだろう？」をテーマに、ディスカッションを行いました。

講師の方々

- ・ファザーリングジャパン滋賀副代表 小野元嗣氏

- ・大津市障がい児サマーホリデー 高坂正枝氏
- ・草津市役所職員 織田泰行氏

Step2.「体験して感じよう」

参加学生と一緒に瀬田キャンパス周辺地域の保育系のボランティア活動をしました。活動後にはそれぞれに振り返りを行い、これから実践したいこととして、“育ガク宣言”を発表してもらいました。

活動場所

- 瀬田東地区民生委員児童委員協議会主催
ふれあい子育て広場（瀬田東支所）
子どもたちとおもちゃで遊んだり、親御さんから育児に関するお話を伺いました。
- ほっこりひろばの会主催
きらきら広場（アルプラザ瀬田）
受付の仕事をしたり、広場に来ている乳幼



児と一緒に遊びました。

●ほっこりひろばの会主催

ほっこり広場（フォレオ大津）

乳児用の月見団子を作ったり、広場にきている乳幼児と一緒に遊びました。

企画終了後に、より多くの学生に育児に対して関心をもってもらおうと、参加者の感想と“育ガク宣言”を中心に瀬田キャンパスの掲示スペース エキシビジョンに活動ポスターを掲示しました。

■参加者の声

Step1.「考えてみよう」

- ・子育てには周りの人の協力が不可欠だと思いました。
- ・自分の想像している子育てと違う部分も知れたので良かったです。
- ・「声かけ」などで私たち学生でも育児に関わることができるのだと理解できました。

Step2.「体験して感じよう」

- ・地域で集まることのできるコミュニティはとても大切なものだと感じました。
- ・子どもが無邪気で可愛くてすごく癒されました。
- ・おばあちゃんも来ていて世代間交流の場になりました。
- ・出生前のことから子育てまで色々なことを聞くことができました。

「育ガク★プロジェクト」での発見

- ・子育ては大変なことだらけだけれども、周りを頼っていくことが大切で、周りの人も協力的になることが大切だと知りました。
- ・子育ては母親や父親だけではなく、地域で協力してするものだということがわかりました。
- ・他のママとの交流、情報交換できる場があるということは、とても大切だと改めて思いました。
- ・子育てについて、親御さんに質問してみると、自分が考えていた子育てのイメージとは違っていることの方が多く、子育てに関する考え方が変わりました。

■得られた成果

- ・企画の発案から実施までの準備で約1年半をかけました。その間にどういった企画をする

ことが“地域の子育て”につながるのかを繰り返しメンバーで議論しました。そうすることで、内容の濃い企画を作ることができ、参加学生から新しい関心を引き出すことができたと思います。

- ・企画をするにあたって、ドキュメンタリー映画『うまれる』の上映会に参加したり、企画メンバー同士で何度も勉強会を開いたり、民生委員等にお話を聞きに行ったりしたことで、企画メンバーそれぞれが育児に関する知識を身につけることができました。
- ・普段は関わりのなかった地域の保育系のボランティアに参加することで、参加した学生および企画メンバーが、子育てに対しての視野を広げることができました。
- ・今までボランティア募集をしていない団体に交渉して協力してもらうことで、今までになかった新たなつながりを持つことができました。
- ・広報期間が短かったものの、チラシや授業広報などで多くの学生に広報をしたことにより、より多くの関心を惹くことができました。子育てに関心のある学生が企画に参加することにより、地域での保育系団体のボランティアニーズに応えることができ、団体との関係を深めることができました。



■学んだこと・今後の課題

反省点としては、「講師との打ち合わせが不十分だった」「企画メンバーまたは職員との情報共有・連携不足だった」といった意見がありが、しっかりとした連絡体制を整えることが必要だったと思います。

活動後のアンケートでは、参加した学生の約半数が満足度100%と答えてくれて、「地域での子育ての大切さ」「子育てに関する考え方が変

わった」など新たな発見をした学生が多く見受けられました。

今回この企画を通して、参加者に“地域での子育て”について知ってもらうことができただけでなく、自分たち企画メンバーも実際に参加者として参加することで新たな知識を得たり、子育てについて考えたりすることができました。企画終了後に企画メンバー自身が“育ガク宣言”を考え、「健やかな子育てができる環

境作りに貢献します」「積極的に育児に関するニュースを見るようにします」「問題意識をもって勉強します」などがあがり、企画を通して問題意識の捉え方・考え方を高めることができました。今後は“地域での子育て”を今後親になる世代である大学生に広めるキープレーヤーとして活動を続けていきたいです。

〈報告者：春本 真也〉

事業名	コミュニティ企画 ～広げよう！瀬田コミュニティの輪～
期間	2013年5月～2015年3月
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加者・人数	A：企画メンバー9名 B：企画メンバー9名、参加学生13名（うち学生スタッフ4名）
企画メンバー（学生スタッフ）	口分田 知佳、小林 陽太、山下 凌司、小牧 裕美、中川 真実、野口 幹、福田 七海、田川 智也、吉元 香織

■経緯・目的

・龍谷大学が所在する瀬田地域において龍大生と地域住民が関わる機会が少なく、瀬田地域の魅力や住民の思いを相互に理解し合えていないという現状がある。このような現状にアプローチするために、龍大生が地域住民と交流できる身近なボランティア活動に参加することで「地域とのつながりの大切さ」を意識してもらおうと考えた。

・災害時には、地域の人々が共に考え助け合える、支え合える関係性が重要で、普段からそのような関係性を作っておく必要がある。

1. 企画メンバー中心の瀬田地域での活動

日時：2013年5月～2014年10月

場所：瀬田地域

■概要

企画メンバーが瀬田地域についてよく知り、ボランティア・NPO 活動センター（以下ボラセン）の学生スタッフとして何が出来るかということを検討するために、瀬田地域でのイベントやサロン、団体等に見学やボランティアに行き、瀬田の地域住民から話を聞いた。

・瀬田地域に興味関心をもち、現在の地域の課題について考える

- ・瀬田地域の歴史、地形等を調べる
- ・龍谷大学社会学部「大津エンパワねっと」の見学
- ・まち歩きや地域住民に話を伺う
- ・大津市瀬田東支所へ訪問
- ・瀬田東学区文化祭の見学
- ・滋賀県社会福祉協議会の研修「避難所運営ゲーム『HUG』」への参加
- ・瀬田東ふれあい子育てひろばの見学
- ・瀬田東学区長沢川周辺交通マナーキャンペーンへの参加
- ・滋賀県営都市公園びわこ文化公園（以下びわこ文化公園）へ訪問
- ・「ゆう・you フェスタ」でのボランティア

■学んだこと・今後の課題

- ・全体として企画メンバーでの共有不足、スケジュール管理不足が反省点としてあげられた。早めに計画し、予定通りに進むように、ミーティングや企画メンバー同士の共有について見直す必要がある。
- ・企画メンバーがまち歩きや瀬田地域の団体を訪問するなどして、地域の魅力を直接感じ、龍大生と瀬田地域の関係性における課題を見つけることができた。また、瀬田地域のことを知り、企画の目的を定め、継続して活動で

きた。

- 龍大生と地域住民がボランティアを通じて直接交流する場を作ったことで「地域とのつながりの大切さ」を相互に意識してもらうことができた。普段から共に支えあえる関係性をつくるのが大切であると感じたため、学生スタッフとして今後も瀬田地域住民との関わりを続けていきたい。2年間の活動を通じてできた「つながり」をどう活かし、活動していくのか、内容については今後検討していきたい。



2. 「防災・減災そなえパークの日」

(以下そなえパークの日)でのボランティア

日時:

事前交流会 2015年3月6日(金) 14時～16時
30分

当日 2015年3月15日(日) 8時30分～
17時

場所:びわこ文化公園

参加人数:

事前交流会 ボランティア参加学生7名

当日 ボランティア参加学生9名、学
生スタッフ4名

■概要

- びわこ文化公園は豊かな自然と多くの文化施設があり、瀬田地域住民の多くが利用する公園である。企画メンバーとびわこ文化公園の「龍大生と地域住民に『地域住民とのつながりの大切さ』を意識してもらう機会をつくりたい」「災害時のために普段から共に考え助け合える、支え合える関係性を作っておきたい」という想いが一致し、龍大生にとって身近で利用しやすい、びわこ文化公園での「そなえパークの日」という防災イベントに参画した。

びわこ文化公園訪問

企画メンバーとびわこ文化公園担当者が、「そ

なえパークの日」に向けての打合せや、終了後には当日の様子振り返りを行った。

イベント広報

学内で立て看板などを用いて龍大生へのイベント広報を行った。また、瀬田地域にある、就学前の子どもと親のための「きらきら広場」など、1の瀬田地域での活動時に訪問したところへ、イベント広報を行った。

事前交流会

共に活動するボランティア参加学生と企画メンバーとびわこ文化公園担当者が事前に集まって交流を図り、企画やそなえパークの日の趣旨・目的について理解を深めた。

当日(イベント来場者:約550名)

1. ボランティア参加学生に資料配布、ブースの説明
2. びわこ文化公園や他団体との挨拶、顔合わせ
3. ブース運営
 - ・防災バックに何入れる?ゲーム

(来場者:約160名)

普段から災害に備えておくことの必要性を伝え、防災について来場者が考え、交流することを目的に、大地震が起こった場面を想定した、ロールプレイングゲームを行った。最後に“防災バックに何入れる?カード”を作成し、参加者に持ち帰ってもらった。

- ・ボラボ救出大作戦! ~君の助けが必要だ!~
- (来場者:約150名)

子どもたちを対象に助け合い・協力の大切さを、遊びを通して伝えることを目的に、火事の場面を想定した、ストラックアウトゲームを行った。助け合い・協力の大切さと火事の時の対応を、カードにして伝えた。

- ・東日本大震災復興支援、大津市の台風18号被害復旧支援ボランティア活動についての展示
- (来場者:約50名)

災害を身近に感じてもらい、防災意識を高めってもらうことを目的に、実際にボランティア活動に参加した学生が、来場者へ、活動の状況や現地での活動から学んだこと、感じたことを伝えた。

4. 片付け、アンケートとワークシートの記入、感想の共有

■そなえパークの日参加者の声

＜事前交流会＞

- ・緊張せずに当日を迎えることができた
- ・事前に「そなえパークの日」の開催場所で、共に活動するメンバーが顔を合わせることで、当日の活動が円滑にできた。

＜来場者との交流＞

- ・子どもを通じて、幅広い年齢層と楽しく交流できた
- ・びわこ文化公園のスタッフとも交流でき、公園にもっと行ってみようと思った
- ・普段、瀬田地域のイベントに参加しておらず、今回のボランティアで瀬田地域の人々のあたたかさに触れるきっかけになった
- ・今まで瀬田地域住民との関わりが少なかった学生が、住民と交流できるきっかけになった。
- ・瀬田地域住民やびわこ文化公園などの他の団体のスタッフと交流することで、学生が地域に興味を持ち、親しみを感じる事ができた。

＜災害に備えてできること＞

- ・自分自身の備えと助け合いが重要であると分かった
- ・いざという時に協力できる関係を積極的に築く努力する
- ・災害への問題意識を普段から持つ
- ・防災・減災についての知識を深めることが

でき、学生が、自分に何ができるのか、何をしていけばいいのかを、具体的に考える機会になった。

■学んだこと・今後の課題

- ・「そなえパークの日」の準備で、目的やブースの内容の詳細までしっかり時間をかけて考えることができた。しかし、当日朝のボランティア参加学生への説明不足があった。また、ブースへの呼び込みなど企画メンバーが積極的にする必要があった。
- ・龍大生と瀬田地域住民が交流する機会ができた。また、防災について、体験やお話などの交流を通じて、龍大生と瀬田地域住民が共に学び考えることができた。

〈報告者：口分田 知佳、吉元 香織〉



事業名	伏見区野宿者支援プロジェクト
実施日	【河川巡回】 2014年4月10日、4月17日、5月14日、6月24日、7月17日、8月18日、9月18日、10月20日、11月10日、12月16日、1月27日、2月10日、3月17日
活動時間	春夏：16時～19時、秋冬：15時～18時
活動場所	京都市伏見区西高瀬川周辺
参加人数	【河川巡回】のべ68名 (学生26名、JIPPO 関係者13名、センター職員13名、西本願寺14名、その他2名)
実施主体	特定非営利活動法人 JIPPO、ボランティア・NPO 活動センター
関連イベントへの参加 (会場：京都市内各所)	
	【花見】4月12日9時～15時 学生5名、職員1名、JIPPO 2名 【いのちのネットワークサロン】4月26日 9時～12時 学生1名、職員1名 【流しそうめん】7月26日9時～15時 学生4名、職員1名、JIPPO 1名 【支援バザー準備】10月17日9時～15時 学生3名、職員1名 【もちつき大会】1月11日9時～14時 学生9名、職員1名、JIPPO 2名、西本願寺2名

■経緯・目的

2008年度末に(特活) JIPPO の専務理事で

あり、龍谷大学名誉教授である中村尚司氏から、「東・西高瀬川および山科川の橋の下などで生

活している野宿者を支援する試みを JIPPO で行うので協力して欲しい」との依頼が寄せられました。実状を知るため、中村氏とセンタースタッフ、学生スタッフ有志で実際に川沿いを歩き、調査してみたところ、支援が必要だと判断し、'09年春より、野宿者の生活支援を目的に JIPPO と協力して伏見区野宿者支援プロジェクトを本格的に開始し、今年度も引き続き活動しています。

当初は、過酷な状況で暮らしている方が住宅に移って橋の下からいなくなるのがゴールと考えていましたが、住宅に入居した後もそれまでのネットワークが断たれたり、新しい環境になじめなかったり、孤独な環境、課題は続くことがわかってきました。そこで '12年度末に、生活保護を受給し、居宅に移行した方を訪問したところ、毎日の話し相手がおらず、不安定な方もおられました。そこで '13年度は、河川巡回に加えて、居宅に移行した方の自宅を訪問する活動も行いました。'14年度は、月に1度の河川巡回に加え、野宿者支援を行う他団体（自立支援ネットワーク、NPO 法人ゆいの会、京都夜回りの会等）主催の四季折々のイベントに参加し繋がりを作りました。

この活動を通じて、参加学生が社会の問題や自分自身の偏見に気づき、自分自身の問題として考え、行動できるようになるきっかけとすることも目的とし、学生に対し広く参加を呼びかけています。

■概 要

JIPPO 関係者、本学学生、センター職員の最大6名で、月に1回、2~3日分の食料等の物資を持って、河川（西高瀬川）の周辺に居住している野宿者を訪問し、世間話をしながら健康状態や困っていることなどについて聞き取りを行い、必要に応じて情報提供や行政への働きかけを行いました。

毎回参加者の変更があるため、顔合わせと、初参加の学生には簡単な活動に関する説明を行った後、支援物資の配布準備を行い、深草キャンパスを出発します。巡回は西本願寺の車両を使って参加者全員で移動しています。活動終了後は、参加学生と JIPPO のスタッフ、コーディネーターとでふりかえりを行い、活動を通じて得た気づきや疑問などを共有しました。

学生への呼びかけは、主に HP やポスター掲示、来室時や別事業の参加者への案内等を通して行いました。

■参加者の声・得られた成果など

- 野宿者支援に参加する機会をいただき、様々なことを学ぶことができました。私は今まで貧困ビジネスという言葉さえ知らなかったのですが、日本でこのような現実があることにショックを受けました。
- 一番印象的だったのは、自分の住所を書くことができないということでした。橋の下とは書けないという、悲しみと悔しい思いが感じられたような気がしました。中村先生から「連絡先が必要なおときには JIPPO の住所、電話番号を使ってもいいですよ」と名刺を渡されたときの Y さんの涙を見たとき、他にも住所がなく悔しい思いをされている方がたくさんおられるのだと思いました。やはり、ボランティアは野宿者の生活を支えるために必要なことであると改めて実感できました。私の知らないことがまだまだあるのでもっと色々なことに関心を持っていきたいです。
- 今日会えた方は、清潔感があったことに驚きました。今まで自分が見てきた野宿者とは違うような気がしました。
- コミュニケーションの取り方に少し難しさを感じました。何を話していいかわからなくなり、話そう話そうと必死になってしまいました。私の話に頷いて聞いてくださり、何か話し出そうとしてくださったときは、とても嬉しく感じました。
- 初対面で、どこまで個人の事情に立ち入る話をしていいのか迷いました。生活保護を受けない理由が気になりました。
- 住む家があること、携帯電話を持っていること、大学で学べること、私の中の当たり前が当たり前でないことに気づきました。貧困が私の身近にもあることがわかりました。

■コーディネーター所感

この1年間は、伏見区内の河川敷で暮らす4名の野宿者の方に関わらせていただきました。台風による河川増水で家財道具や衣服等、全て流されてしまったり、騙されて全財産を盗られてしまったりして今の河川敷にたどり着いた後

も、河川工事のため立ち退きを迫られたり、中学生に襲撃されたりする中で懸命に生きている野宿者の現実を目の当たりにしてきました。

昨年度実施していた居宅支援は4月以降実施せず、月1回の河川訪問以外に、自立支援ネットワーク主催の季節毎のイベント（花見、もちつき等）やサロン活動のお手伝いを行いました。野宿者の方、生活保護を受けて居宅に移られた方、支援者の方々と交流することができました。

参加した学生とは、活動後に振り返りを行っています。野宿者の皆さんに直接会って話すことで、自分が持っていた偏見に気づき、社会の問題に目を向けるきっかけになったと思いま

す。「君ら若いもんが頑張って社会を変えていくんやで。社会に目を向けて政治にも興味をもってな。」と声をかけられ、考えさせられることが多かったようです。この現実を一人で変えることはできないけれど、何か動き出さなくてはという思いが学生の中に湧いてきているのを感じました。

これからも、河川敷から一人もおられなくなることをめざし、ニーズがなくなるまで学生との訪問を続けていきたいと思います。

〈報告者：古澤登美代
（深草キャンパスコーディネーター）〉